

66年目の8月15日に際して－「いのちと希望を育む復興」を目指す

1945年8月15日。6月23日、8月6日そして8月9日と記憶から消し去ることのできない苛酷な日々の積み重ねののちに、日本の国民は、連合国への降伏による戦争の終結の日として、その日を迎えました。ヨーロッパ戦線に続いて、アジアにおける戦火が終息し、第2次世界大戦は終わったのです。66年目の8月15日、決して繰り返してはならない人類に対する惨禍に深く思いをいたし、世界の、そしてアジアの、また、私たちの祖父母、父母の世代の数え切れない戦争の犠牲者を、衷心より謹んで追悼いたします。

2011年3月11日。東北・太平洋沖の大地震とそれに起因する大津波は、死者と行方不明者があわせて2万人をこえる未曾有の災害をもたらしました。また、その中で東京電力福島第1原子力発電所事故は、今後の展開を測りがたい形で放射能の被害を生みだし、事故収束の見通しが不透明なこととあいまって、国の内外に大きな不安を与えるとともに、被災地域の復興に一層大きな困難を加えています。ここに、大震災の犠牲者の方々に心からの哀悼の意を捧げ、被災者のみなさまに謹んでお見舞い申し上げます。

3月11日は、第2の8月15日として語られることがあります。身近な人々を失い、平和な生活が破壊され、故郷ががれきと化してしまった状況が、そこには重ね合わされています。そして、そのような悲惨さから立ちあがって戦後の復興をなしとげた日本社会の力とたくましさが、東日本大震災からの復興を目指して、期待されているからです。8月15日は、大切な多くのものを失ってしまった日であると同時に、振り返れば、新しい社会を築き始める希望の出発の日でもありました。3月11日後の日本社会は、同じ課題に直面しています。

日本学術会議は、1949年1月、「わが国の平和的復興、人類社会の福祉に貢献し、世界の学界と提携して学術の進歩に寄与する」ことを使命として創設されました（日本学術会議法前文）。8月15日からの復興は、日本学術会議の使命の最重要のものでした。いま、私たちは、3月11日からの復興に貢献することを最大の課題とみなしています。さきに発表した提言では、復興の目標を「いのちと希望を育む復興」として定式化しました。この2つのことばには、被災地域の住民とこれを励ます日本の国民の願いが集約されています（提言「東日本大震災被災地域の復興に向けて－復興の

目標と7つの原則」2011年6月8日)。

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/shinsai/pdf/110610t-2.pdf>

日本学術会議は、3月11日からの復興のために、科学・技術が何をできるかを実践的に追求し、被災地域への具体的な助言・提言を用意し、また、政府に対して実効的な提言を行います。私たちは、科学・技術が社会の課題の解決のために不可欠なものであると確信していますが、それが万能のものであるとは考えません。科学・技術は、それ自体としてリスクを生み出すものでもあり、そのことの自省こそが必須です。それゆえ、日本学術会議の活動は、社会との、とくに復興について被災地域の住民のみなさまとのコミュニケーションのなかで進めなければなりません。

国民のみなさまからの御意見と御批判をいただきながら、これからも全力をあげて活動をしていく決意を、8月15日のこの日に、あらためて表明いたします。

平成23年8月15日
日本学術会議会長
広 渡 清 吾